

## 平成 26(2014)年度

## NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2015年3月13日
氏名	米山 敏裕
所属団体	特定非営利活動法人地球の友と歩む会
受入機関名(所在国)	オーストラリア YMCA 同盟 IAVE(International Association for Volunteer Effort)Australia
研修期間	2014年9月20日～11年12日

研修テーマ	NGO と企業の連携・協力ならびに NGO マネジメント
全体研修目標	NGO と企業がどのように連携しているのか、その実態と課題をさぐり NGO のマネジメントに生かす

## 具体的な研修内容

## (1) YMCA の資金調達、広報戦略、連携促進について

## —①コミュニティづくりが YMCA の基本理念であることを学ぶ

オーストラリアには全土で 24 都市の 713 か所に YMCA の拠点が置かれ 12,000 人の職員が働いている。YMCA のビジョンとして「全ての人々が健康で幸せを感じられる環境をつくること」ミッションとしては「知性・精神・体力 <Mind/Spirit/Body>」においてバランスのとれた人間形成をめざす、そのための機会を提供する」となっている。そして「コミュニティへの奉仕、強いコミュニティづくり、コミュニティの開発」を活動のベースにしている。今回視察研修した各地の YMCA はどこもコミュニティを意識して活動がすすめられ、経営面では地域住民をプログラム参加に取り込み、プログラムへの参加費が大きな事業収入となっている。また、地域の福祉介護、障害者ケアを施設ごと行政から委託されて運営している。職員が住民の声を聞く調査に同行し、ニーズ把握の基本についても学ぶことができた。

## (1) —②多くの会員を取り込む資金調達活動は大きなメリットとなることを学ぶ

オーストラリア YMCA 全体ではプログラムへの参加者が年間 2,800 万人あり、プログラム収入を含めた総収入は 2013 年度の統計では 3 億 3,500 万ドルにもなっている。しかし資金調達による収入は 5% の 1,600 万ドルとなっていて、その用途はすべてコミュニティに在住する介護を必要とする高齢者と障害をもっている子ども、成人のために働くボランティアや彼らのスキルアップ研修経費に充てられている。

具体的にはどこの YMCA 施設の玄関には募金箱が設置されていて誰でもが気軽に募金ができるようになっている。募金箱も工夫されていて硬貨専用の募金箱では投入した硬貨が箱の中をグルグル回る仕掛けになっていて、子どもも大人も遊び感覚で寄付ができるようになっている。視察をした YMCA では年

間約 3,000 ドルが寄付されている。どこの YMCA でもおこなわれているのがクリスマス時期に合わせての募金キャンペーンである。キャンペーンの方法は各 YMCA のアイデアですすめられるようで募金額の 70% がこの時期に集められる。キリスト教徒の多い国を反映して効果はあるが、一方でこの時期はどこの団体もこぞってダイレクトメールを送るので、できるだけ開封されて寄付に結びつく工夫が必要になってくる。YMCA の場合は各 YMCA とも約 10,000 ~ 20,000 通のダイレクトメールを送り、電話でお願いをしたりして成果をあげている。毎年 100% に近い達成率となっている。会員という母数の多い人たちを対象にしたキャンペーンは大きなメリットであることを学んだ。一方で、資金調達担当職員の数が少なく、達成できる額も限界がある。

- (1) —③アイデア募金やスポーツ選手の協力が大きな効果をあげていることを学ぶ
- コーヒーショップで 2 杯分の代金を払うと、支払に余裕のない人のために提供される”Suspended Coffee”にヒントを得てできたのが”Suspended Swim”といわれるものである。オーストラリアでは水泳を楽しむ人が多く、プールも身近なところであり South Australia 州にある YMCA がブランド化したものである。プールを利用する YMCA メンバーが支払う使用料が地域にある救世軍の社会奉仕プログラムに使われたり、オーストラリア北部に住むアボリジニー（先住民）の職業 訓練経費に使われている。プールの入口には寄付先メニューが掲示されていて、自分が支援したいプログラムを選んで水泳を楽しむ仕組みになっている。また”Swimathon”と呼ばれるプログラムでは「すべての人に水泳の楽しさを！」を掲げ元オリンピック水泳選手がボランティアで子どもや視覚障害、知覚障害糖尿病患者、肢体不自由な人、肥満な人を対象にした水泳教室を出張して指導する。このプログラムに賛同する人から寄付を募る。2013 年には 2,775 ドルの寄付があった。YMCA のメンバーも今月は 100km 泳ぐことを宣言し寄付を募ったり、当人が自分の目標が達成できたら寄付をするなど、寄付しやすい環境ができているのも YMCA の特色であることを学ぶことができた。
- (1) —④コミュニティでの人脈の発掘と開発が資金調達の基本であることを学ぶ
- ビクトリア州の州都メルボルンから北に 150km に位置する中都市 Bendigo、ここにある YMCA でもコミュニティが意識され活動の方針にも “We Build Strong People, Strong Families, Strong Communities” が掲げられている。その推進要素を “Partnership” “Communication” “Support” としている。「協働、対話、支援」といえる。この理念のもとに資金調達もすすめられている。コミュニティのなかにパートナーとなる機関・団体を見つけ、YMCA のミッションを共有するための対話をし、コミュニティに還元する支援活動を展開していく。すべてがコミュニティのなかで循環する仕組みになっている。資金調達担当者は YMCA のパートナー団体を訪れ、昼食を共にしながら地域にある課題やニーズを聴いていく。その課題やニーズを YMCA で協議し、解決策を提案し、ボランティアや専門家を派遣していく。それにかかる経費を賄う募金をしていく。最近では顕著になっているのが家庭内暴力と高齢者の介護となっている。様々な課題に対処できる専門家を見つけてプログラムにつなげていることを学ぶことができた。

(2) フィランソロフィー協会が地球規模の課題を提起、寄付文化醸成を学ぶ

IAVE(International Association for Volunteer Effort)Australia に加盟しているフィランソロフィー協会は 320 の企業や財団が加盟し会費や寄付によって運営されている。具体的な活動としては地球規模で問題になっている課題、『天候異常』『森林伐採』『清潔な水の不足』『大気汚染』などを知り、考え、行動するセミナーや研修会を開催したり、途上国への支援活動をおこなう NGO へ助成金を出したりしている。地球規模で起こっていること、途上国で状況を改善していくために企業としてどのような貢献ができるかのアドボカシー活動も展開している。最近では企業が生産している水を浄化する機械やソーラー、風力発電機を途上国で活用できるための橋渡しもおこなっている。また、企業からの寄付をしやすくするための寄付控除制度の広報にも力をいれている。財界への影響力のあるフィランソロフィー協会の働きは寄付文化醸成に役立っていることを学ぶことができた。

(3) Berry Street にて、資金調達広報があつてこそ成果が発揮されることを学ぶ

IAVE に加盟している“Berry Street”は子どものケアを 1877 年からおこなっている NGO である。

活動内容としては家庭内暴力、親の育児放棄、離婚などにより被害、虐待を受けている子どものケアとなっている。また、このようなことを防止するためのアドボカシー活動や子どもを健やかに育てるブックレットなどを作成している。子どもからの相談を受けるホットラインも設けられ 24 時間対応している。この Berry Street の連携先は財団をはじめ NGO、ボランティア団体、企業、小・中学校、大学、研究機関、政府など 220 ある。これらから子どもに関する情報を得たり、Berry Street から発信をしている。発信内容としてはどのようなサービスがおこなわれているか、リーダーシップ技能訓練、セミナーの案内、行政と協力しておこなっているプログラム紹介、また、子どもを預かる“Foster Care Campaign”募集案内など季刊で発行されるニュースレターでおこなっている。できるだけ多くの人たちに子どもがおかれている環境を知ってもらい、関心をもってもらうことを主眼にして広報活動をおこなっている。その成果が寄付や募金につながっている。広報に一役買っているのがスポーツ選手で、Berry Street を支援している有名なラグビー選手を起用してニュースレターで紹介している。広報が知名度をたかめ、資金調達になっていることを学ぶことができた。

研修の成果

(目標に対し達成できなかった内容がある場合は、その理由とあわせて報告してください)

<YMCA での研修の成果>

- ◆YMCA での研修をとおして YMCA のビジョン、ミッションが忠実にコミュニティのなかで実現されていることを学ぶことができた。コミュニティから人材を発掘し育てコミュニティに還元していくことは基本的な戦略、方針としてプログラムに反映されていることを学んだ。
- ◆コミュニティにある社会的資源、とくに人材発掘では YMCA メンバーも含め、地域社会でアンテナを張り、コミュニケーションをおこなっていくことの大切さを学んだ。研修中もさまざまな会議、昼食会、コーヒブレイクに同行させてもらい担当者は地域の課題発掘に集中し、活用できるリソース発見に努める姿勢は学ぶべき

点であった。YMCA の役割はよりよいコミュニティづくりの仲介者であり、インキュベーターを果たしていることを学んだ。

- ◆YMCA はコミュニティの人々からも信頼され、企業、行政、非営利セクターとも協力関係を持ち、連携して組織運営、経営にもあたっている。とくに YMCA のノウハウが活かされる人材育成の面では行政からの委託事業がうまくマッチしたものになっていることを物語っている。

#### <フィランソロフィー協会、Berry Street での研修の成果>

- ◆フィランソロフィー協会は財界と強い関係をもっている利点をいかして地球規模の問題を提起して NGO と結びつけたり、企業、財団関係者への啓発活動は評価できる。寄付控除制度の促進も寄付文化を促進するために大いに貢献しているものであることを学ぶことができた。
- ◆Berry Street という NGO の歴史は長く、州内でも知名度の高いもので多くの実績をもっていることが広報によって伺うことができた。常に子どもの幸福を願っての活動方針がミッションとして確立されていることも学ぶことができた。同時に協力団体、寄付団体、企業名を広報誌に紹介していく姿勢も参考になる点であった。

#### <研修目標が達成できなかつた点>

- ◆今回の研修で IAVE に加盟している多くの NGO やボランティア団体での研修を期待していたが、担当者の不在、受入機関候補が少なさ、連絡調整に時間がかかり結果としてフィランソロフィー協会、Berry Street、Bendigo Volunteer Resource Centre の 3 か所になってしまった。できるだけ時間をかけて研修を行いたかったが、とくに企業との連携、広報戦略、人材育成面の詳細については学ぶことができなかった。
- ◆Fundraising Institute Australia での研修も予定していたが調整がつかず学ぶことができなかった。
- ◆NGO Management School Switzerland が香港で予定していた研修 (Designing and Planning Project in Development および Project Cycle Management in Development Work) は、先方の都合で中止となり受講できなかった。オーストラリアでの研修成果を共有することも願っていたが、残念な結果となった。

### 本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法

#### ①資金調達の基本方針、戦略の策定

オーストラリアではどこの団体においてもビジョン、ミッションが明確にされていて、それを実現させていく活動方針が 3 年～5 年計画で策定されている。毎年評価もされ次年度の目標も組織内で共有されている。当会でもビジョン、ミッションは掲げられているが、それに沿っての年度ごとの計画や達成目標が明確ではない。ビジョン、ミッションに沿った活動をおこなうための資金であることを組織内で再確認が必要である。

#### ②国際協力 NGO 支援者へのアプローチ

途上国での活動成果をどのように日本のなかで表現していくかは支援者を増やしていくためにも工夫する点である。広報面での力量不足、資金不足もあるがプロボノなどの制度を活用して早急に取り組む課題である。

### ③人材育成のための研修制度の活用

資金調達をすすめるための技能研修の機会は近年増えてきているので、それへの参加や研修内容の共有を理事会や運営委員会でおこない、具体的な目標設定、活動計画を策定していく。

当会でも会員制度があり、支援者も企業をはじめ、学校、キリスト教会など多く登録されているので、協力者になれる人材発掘と活動への参画を促していく。

### ④企業を巻き込むための対話と理念の共有

企業との連携、協力面では物品寄付、募金に留まっている現状から脱却するには CSR 担当者との対話をすすめていく必要がある。国際協力の分野においても企業の参画は関心をもたれているところである。途上国での成果報告もさることながら、現地ではなにができるか、双方の強みは何か、どこの部分で協力ができるかについて対話が不可欠となっている。途上国の現場への入り方、接し方、活動の基本スタンスについては NGO の強みを生かしていける点である。企業の人材育成面からも NGO がかかわっている現地のフィールドを提供していくことができる。

## 本プログラムや事務局側に対する提案、要望等

- ① これまでの本プログラムのスタディ員の報告から研修期間のことが提言されているが、NGO のスタッフが日本事務所の職場を離れて海外に出るには多くの負担がかかるため短期間もやむを得ないと思う。しかし、国内での準備や研修国での調整はこれまでの渡航者の情報を事務局が研修員に提供することで補うこともできる。
- ② 今回の私の例では研修受入先の調整がスムーズにいかず、苦慮したこともあった。早めに準備を開始していくことが肝要であり、申請前からできる準備はしておくべきだろう。
- ③ 研修国によってビジネスのすすめ方、文化、価値観などが異なるのは当然であるが、事務局でもできる限りの情報を提供できる体制を期待する。特に研修国での宿泊関係、生活物価など過去の研修者からの情報収集もおこなって参加予定者に案内していくことは有益である。  
今回は研修先の都市に日本在住者がいて JANIC から紹介いただき、現地でもお会いしていろいろな生活上のことや、研修訪問先についてのアドバイスをもらったことは心強いものとなった。

## その他

(総合的に研修成果を理解するために、写真類、研修員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、あわせて添付願います)

- ① 今回のスケジュールでは香港での研修も予定されていたが急遽中止になり機会をみてまた参加をしていくことを願っている。

## 平成 26 年(2014)年度「NGO 海外スタディ・プログラム」活動写真



メルボルンにある YMCA 連盟本部



ベンディゴ YMCA 資金調達担当者の  
広報チラシ作成



遊び感覚でコインの  
寄付金を入れるマシン



YMCA に掲示されている  
寄付額の成果表



YMCA 玄関に設置されている募金箱



IKEA のインターンと一緒に  
NGO=Berry Street での活動



NGO=Berry Street で寄付された  
クリスマスギフトの整理ボランティア



ペディゴにあるボランティアセンターで研修

以上